

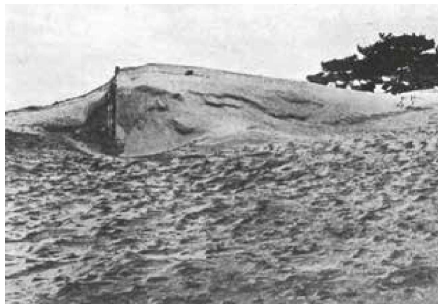


かつて大風が吹き続けて
砂に埋まってしまったムラがあった

千々乱風伝説

村松海岸には、大風によりムラが砂に埋まったという千々乱風伝説が伝わります。平成15年、工事中に砂の中から遺跡が発見され、伝説は本当であったことが判明しました。砂の中から発見されたのは、約500年前の塩作りを営むムラでした。なぜこのムラは砂に埋まってしまったのでしょうか。

塩作りには海水を煮詰めるための薪が必要です。このムラでは塩を作るために薪として木の伐採を続けた結果、砂を遮っていた木までも切ってしまったため、押し寄せる砂を防ぐことができず、砂の中に姿を消したのではないかと考えられています。伝説のムラはどのようなムラだったのか、詳しくは歴史と未来の交流館へお越しください。



1 約1000年前
荒涼とした砂丘が広がる



2 約1000年前
砂防林造成が始まる



3 約500年前
砂防林の緑が広がる



東海村愛林組合 深谷 隆さん

松葉も枯損木も全てが資源だった

中学生の頃、松葉さらいや砂防林の垣根をつくる手伝いをしていました。松を植樹するためには、風よけとなる砂丘のそばに垣根を作る必要があったんです。垣根は、まず1本6尺(約1.8メートル)の棒を立てるため、スコップで砂浜を3尺(約90センチメートル)掘りました。掘ったそばから砂が流れ込んでくるので大変でした。垣根の根元には、

堆積した砂からハマザク(浜防風)が生えていました。家に持ち帰り、食べたこともあります。他には、周りの人々が枯損木(枯れた木の競売)を行っていました。落札した松は、かまどの燃料や、大きいものは家の建築資材として使われました。今ではお金を出して処分する枯れ木も、当時はお金を払って買っていました。

大正7年、村松村の村長は、村民の生活を飛砂から守るため、茨城県知事に嘆願書を提出しました。そこには、先に述べた砂の被害に関する現状と、「このままでは先祖代々の土地を離れなければならなくなります。どうか助けてください」といった悲痛な思いが書かれていました。

知事に嘆願書を提出

約1000年前、村松海岸には砂丘が広がっていました。海から吹き付ける潮風は砂を飛ばし、次々に砂山をつくり、周辺に暮らす人々を苦しめていました。当時の村松村の村長によると、「まるで津波が押し寄せてくるように、また溶岩が噴火して流れてくるように砂が押し寄せてくる」「飛砂の被害は本当にひどい状況で300軒あまりの集落や寺社はいまにも砂の中に埋まってしまう危機に瀕している」と表現されています。

砂に苦しめられる人々

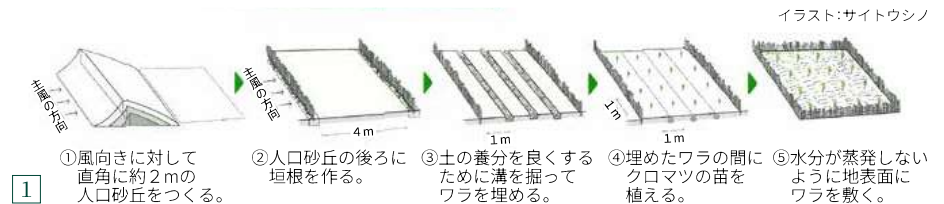
砂防林の造成に着手

嘆願書や多くの人々の働きかけにより、村松海岸は大正7年に農商務省による「海岸砂防林造成ニ関スル試験地」に選ばれました。大正7年から、河田杰(たけ)農学博士を中心として海岸に砂防林(砂や潮風の被害を防ぐために植えられた森林)を植える研究が始まりました。河田博士は海岸に林を造成する方法について研究し、その結果、海岸には黒松が適していることが判明しました。

村民を守る砂防林

村民の願いは、河田博士の尽力と村民の協力により実現しました。植樹に携わった村民は、約2万3000人。長い年月をかけて先人たちが一本一本植えて育てた黒松は、今もなお、砂防林として現代の私たちを守ってくれています。

河田博士が研究した海岸砂防造林法



※ ①②③④…歴史と未来の交流館「展示解説シート」より引用

松は当時の暮らしに欠かせないもの

小学生の頃は、よく両親と共に砂防林で「松葉さらい」をしていました。当時は、ガスやIHがなかったため、松葉を燃料として使っていたんです。かまどでご飯を炊いたり、五右衛門風呂の湯を沸かしたりするときにも欠かせませんでした。松葉は程よく油分を含んでいるため、火が付きやすかったです。他には、サツマイモの苗床に

も使いました。苗床に松葉を敷き、水をまき、その上からビニールを敷きます。これにより、松葉が発酵して温度が高くなり、いい苗床が出来上がるんです。松葉さらいは良い思い出です。当時、砂防林ではリスや野ウサギなど野生動物を見ることができたので、手伝い半分、遊び半分で、楽しみの一つでもありました。



東海村愛林組合 宮内 昇さん